

26 お雇い外国人（7）生野銀山：ジャン＝フランシスク・コワニエ

ジャン＝フランシスク・コワニエは、サンテチェンヌの鉱山学校を卒業した後、フランス政府による調査隊に加わってマダガスカルやメキシコを探検し、ゴールドラッシュに沸くカリフォルニア州など世界各地の鉱山を視察し、1867年から鉱業資源調査のために薩摩藩によって招聘されていました。明治政府は、江戸幕府から受け継いだ産業資産の一つである但馬国の生野鉱山の鉱山経営を近代化するため、おそらく第一号のお雇い外国人としてコワニエを雇い入れました。



Jean Francisque
COIGNET
ジャン＝フランシスク
コワニエ

コワニエは、鉱山技師として生野銀山に赴任しました。そこでは、当時の欧米の先進技術を伝えるために鉱山学校を開校し、技術者の育成に務めました。ここで学んだ生徒の一人には、日本画家で地質学の研究もした[高島北海](#)がいました。

生野銀山は、1542年に地元の役人によって銀石が掘り出されたことが始まりとされています。生野は銀のみならず銅や錫も産出し、江戸時代には、幕府の天領となり、佐渡金山、石見銀山とともに幕府の財政を支えました。しかし、コワニエが目にした生野銀山は、廃墟に近い状態だったと言います。人力のみに頼っていた採掘作業に火薬発破を導入し、運搬作業の機械化を推進し、軌道の敷設や巻き揚げ機の設置をして、作業を効率化させました。コワニエは、フランスから地質家、鉱山技師、坑夫、医師らを招き、総勢20数名のフランス人が生野銀山の仕事に従事するようになりました。家族も入れると、50名近いフランス人が生野で生活していたと考えられています。コワニエの指導によって、生野銀山は、近代的な採掘方法を取り入れた鉱山になりました。

コワニエは、日本滞在中に各地の鉱山調査も行い、1874年に「日本鉱物資源に関する覚書」を著しました。

生野銀山は、1973年に閉山し、現在は史跡として一般公開されています。1889年から7年間、生野銀山は皇室財産となり、当時の宮内省が所管した時代がありました。現在でも、菊花御紋が入った門柱が残されています。この門柱は、当時の工場正門のために作られたもので、菊花御紋入りの門柱はとても珍しいものです。

生野銀山がある兵庫県朝来市は、フランスのセーヌ＝エ＝マルヌ県のバルビゾンと姉妹都市提携を結んで、芸術を通じた交流をしています。鉱山から芸術へ

26 お雇い外国人（7）生野銀山：ジャン＝フランシスク・コワニエ

と形は変わりましたが、生野とフランスとの交流は続いています。



掲載日：2023 年 5 月 2 日